コラボ教育での学び　～看護師経験をもつ学生として思うこと～

神戸市看護大学 編入３年生　中塚絵理

神戸市看護大学には、子育て中の方々のふれあいの場となるコラボカフェでのボランティアなど、地域の方々と接する場が多く設けられています。また、地域保健論という授業の中では、実際に教育ボランティアさんに対して、グループで保健指導をおこなう部分もあります。このように、学生同士ではなく実際に地域に住む人々を対象とすることで、住民の方々のニーズや、反応、理解度などをよりリアルに見ることができると思います。最近は保健指導の内容が簡単すぎるという声もあるらしく、住民の方々の健康に対する関心の高まりを感じています。

27年度入学の編入学生たちと
（筆者は前列中央）

私は編入３年生なので、入学する前は看護師として地域医療に携わっていましたが、患者さんが今まで慣れ親しんだ環境の中で療養できると、やはり強い安心感があるのか、入院中は暗かった表情が、在宅に変わったとたん生き生きとしていく様を目の当たりにしました。このように、地域・在宅での療養は患者さんにとってプラスなことが多い反面、家族の負担が増えることも多く、患者さんを含めた家族全体をどのように援助していくかが今後の課題であると思います。私は今までの経験の中で、地域・在宅医療に関わっていくためには、幅広い知識やコミュニケーション能力ももちろん大切ですが、この地域が好きで、そこに住む人たちのために頑張りたいと思える気持ちも大切ではないかと感じています。必修授業の関係で残念ながら私は受講ができませんでしたが、１年生の選択授業に「神戸学」という科目があり、地域の文化や歴史を学問として学べる環境があるということに、とても驚き興味を持ちました。これから神戸という地域をもっと知り、卒業後の看護に生かせるように頑張っていきたいと思います。

COC 研究ひろば　第３回
～「もの忘れ看護相談」活動を基盤とした地域住民への支援を考える～　後編

神戸市看護大学 老年看護学分野 講師　清水昌美

前編では、現在取り組んでいる研究（テーマ：認知症の高齢者と家族が地域で暮らす力を獲得していく過程と支援のあり方の検討）の基盤となる「もの忘れ看護相談」活動についてご紹介しました。後編では、昨年度からの研究経過をご報告します。

本研究では、もの忘れや認知症に関する悩みを持つ方々やその支援者が、地域の資源を有効に活用しながら、今後の見通しを持った生活を送る一助となるような情報を発信したいと考えています。情報発信に先駆けて、平成26年度は「もの忘れ看護相談」の来談者の相談内容（主訴）を分析しました。具体的には、平成24年3月～平成26年7月に個別相談を受けた43件（継続利用および電話での対応を含む）のうち、研究同意が得られた延べ34件の個別相談記録から、主訴に関する内容を取り出し、内容別にグループ分けをしました。その結果、【もの忘れ・認知症に関する知識や情報を得ることへのニーズ】、【もの忘れ・認知症の中核症状に関する相談】、【認知症のBPSD（行動・心理症状）やその対応に関する相談】、【今後の見通しに関する相談】、【受診に関する相談】、【介護保険サービスに関する相談】、【介護負担に関する相談】、【独居の認知症の人についての相談】、【認知症以外の健康相談】の9つのグループができました。

筆者(前列左端)と共同研究メンバー

今後は、これらの主訴に対して知っておいたらよいことや同じような悩みを持つ人の生活状況などを組み合わせて架空の事例（モデルケース）を作成し、ホームページなどでご紹介したいと考えています。相談活動とともに進めていく研究なので、どのような形になるのか予測しづらいですが、成果が楽しみです。研究メンバーと力を合わせて一歩一歩進めていきたいと思っています。